

保育の一日

東京女子高等師範學
校材附屬稚園第二部

みどり

私の園では庭が廣いので可成外で遊ばせる事にして居ります、其中の一日を申上ませう。

六月二十日 攝氏七十二度

梅雨に入つてから十日目でした、雨も降らずといつて照りもいたしませんおまけにそよ〜と心持のよい風が有るのです。

何で此自然に親します居られませう。

葉末の露のまだ乾かぬ頃、私は一同を呼び集めて南の小山の麓に行きました。

そこには紫陽花が咲き匂へる小家が有りまして一帯は櫻や椎や榎等の大木がしつとりとした濃い蔭を印して居ます。

クローバや、ヨモギや、カタバミなどの生ひ茂つた草原に續いて、ジャガイモや、キャベツや胡

瓜等の畑が有り、畑の向ふは鎮守の森で、上枝の枯れた樅や鳥の巢の有る榲なんどの間から青銅の屋根や、丹塗の柱などが見えて居ます。

私は一の組の方の強さうな男の子と共に、六脚のベンチを小家の前の木蔭に据ゑました。そして二の組や、三の組の子供に腰を掛けさせ、その他を其の後に並べて、さて一同の顔を見ました。噺何といふ可愛い顔で御座いませう。

目鼻口頬、凡て嬉しさが溢れて、私が何か云ふかと待つて居ます。

私「お早うございます」、子「お早うございます」

「今日は此處で唱歌うたつたり、遊戯したりして面白く遊びませう。」(拍手喝采起る)

「さあ修身のうたうたひませう」

我子よかれと二度きれいに唱ひました。

「今度は彼蝶々のやうにきれいにお庭を舞ひ歩きませう。」

蝶々／＼の葉にとまれ

菜の花にあいたら櫻にとまれ………

と彼方此方にひら／＼とエブロン掛けし姿の可愛らしさ、中にはとまつた／＼と、小草にとまりたり、私にとまつたり二人手を引きあつたりするものもあつて二度三度小家のまはりをめぐるつて、元の席に歸り、蓮花よ風車よ何よと倦む事なく唱ひました。

日頃唱ひふるした歌ながら其日は又格別の趣がありました。

○今度は皆で此お庭の草を採りませう。一本づつこんなように違つたのを幾つも／＼とつて見ませうさあ採つて入らつしやい。」

△「ハイ」勇ましく答へて蜘蛛の子の散るが如く私一人を残して去りました。

絲や鉄や帳面などを用意して待つて居ますと、やがて一人かへり二人戻りして、一々報告しまし

たり、結へて下さいと申ますので一の組の子供には可成自分で敷へさせたり、糸で結へさせたり致しました。私は小さい子供のを敷へたりしぱつたりそれ／＼の數や其様子やらを控へたり、暫くごた／＼致しました、けれども別に喧嘩もいたづらも致しませんでした。

控へ終つて見ますと、少きも二三種多きは十四五種に及びました。猶個人々に就いて見ますと日頃綿密な子は採り方もきれいで、種類も多うございませすし、亂雑な子は枯葉や根のついたまゝで且大小不同で數も少うございませす。又小心翼翼とした採り方のや、大膽に抱へて來ますのや、倦み易いのや、わけもなくうろ／＼するのや、同種ばかり多く採つたのや。一旦採つては見たが蝶を追ふのが面白くて捨てたのや様々でした。で、あまりひどいには整理させましたり、力の餘つて居る子や、まだ採らぬ子等を集めて、

○「さあも一度探りませう。そして先生の探つたのと同じのが探れたかどうか較べて見ませう」と、又初めましたが、狡猾な子は私の後についてばかり居ました真面目な子は隈なく探しますし真面目の中にも遠征するのと、近所を丁寧に探すのとございました。

此處でも亦個性を知る事が出来ました。今度は二三普通の物の名を教へながら較べました。

○「これはクローバです。あひましたか△ハイ」

○「これはたんぼです。あひましたか」

△「ハイ私これで二度！」

○「これはあかぎです。」

△「どれ先生、これですか、うれしい三度よ！」

四度五度おもしろく此較する事が出来ました。

丁度お辨當の時間も参りましたので

○「さあ歸りませう」と申しますと、

△「先生お辨當？早いわねえ先生又あしたね」お手

水を使つて、きれいに拭れた食卓に著きました。

静に埴生の宿を唱つてやりましてから大きい子

の世話で皆静にお辨當頂いて又外に出ました。

今度は砂場でお山をこしらへたりお池だの畑だの

作らへて先程とつた草を植ゑ比較的静に遊ばせて

一時におかへりに致しました。

兒童の救急手當法

醫學士 藤 井 季 旭

これはフレイベル會主催の小兒救急手當講習會の講義筆記を訂正せるものであります。實地に行つて見るか若くは繪畫を挿まなければならぬ様な術式は遺憾乍らこゝに省略しました。例へばジルベステル氏人工呼吸法の如きは其の一例であります。其の他講習の際にお話し致しました理論めいた所も同じく割愛することに致しました。